

小説半導体戦争（七）

杉田望

7 シリコン・バレー

1

米国大陸の地図を開くと、アメリカ太平洋岸のほぼ中央にサンフランシスコがある。木原シオリは手にしたアメリカ大陸の地図を熱心に見ている。

隣に座る理恵は機窓から次第に近づいてくるサンフランシスコの町並みを目をこらすようにして見入っていた。乱気流に揉まれ、機体が激しく揺れた。

機体はゆっくりと左に旋回しながら地上に近づいている。シテイを中心にベイ・エリア沿いに発達したサンフランシスコは広大なメガロポリスを形成、高層ビルが連立する大都市であると同時に、東洋と西洋、古いものと新しいものが、奇妙に溶け合った美しい街を作り上げている。

日本企業の対米投資が集中しているのは、西海岸ではサンフランシスコである。土地やビルの買占め、さらには企業買収など、日本企業の活動がにわかに活発になったのは、八〇年代に入ってからのことだった。だが、反トラスト法違反事件が起こってから、西海岸一帯でも日本人や日本企業に対する地元の人々の反応がことさら敵しくなってきた。反日暴動まがいの騒ぎが起こったことを、地元の新聞が伝えていたのは、つい一週間ほど前のことだった。

サンフランシスコのすぐ近くに、米国のコンピュータと半導体産業のメッカであるシリコン・バレーがあり、シリコン・バレーの不況が深刻化していることも、余計に神経が過敏になっている原因のひとつであるように思える。半導体関連産業



で働く労働者が失業で街に溢れているともいわれているのだ。

ハイテク産業の不況はサンフランシスコにも深刻な影を落していた。しかし、そんなことにはおかまいなしに、この正月にも日本人の観光客が大挙してサンフランシスコに押し掛けている。そんなことも地元の人々の神経を逆撫さかなでしているのかも知れない。

機窓からサンフランシスコの高層ビルが聳そびえる見事な街並みが広がってきた。夕焼けの照り返しのなかにゴールデンゲート・ブリッジが姿を現わし、機はゆっくりと旋回しながらサンフランシスコ国際空港に向かって、着陸態勢に入ろうとしている。

シオリの表情はひどく憂鬱そうだ。ロサンゼルス地区連邦裁判所に留置されている同僚の黒田英俊との面会は許されはした。しかし、いつ拘束がとかれるか、裁判を担当することが決っている弁護士は、悲観的なことしか口にしなかった。

もちろんロサンゼルス・ジェットロや領事館は、地元の有力政治家や関係方面に働きかけるなどして、黒田の釈放に全力を上げていたが、まったく見通しがたっていない。その対応の悪さに、シオリは本気になって腹を立てている。

「これも勉強になるさ」

拘置所で面会した黒田が、案外に元気な顔をしていたのが救いである。

黒田は楽天的というのか、冗談を飛ばして人を笑わせたりするところは相変わらずだった。しかし、面会しているあいだは、事件に関する一切のことをはなしてはならないという誓約書を裁判所に提出していたため、検察当局からどのような取調べを受けているのか、聞き出すことはできなかつた。別れぎわ、逆に黒田はシオリを励ます言葉をかけてくれた。そのとき、シオリは熱いものを感じたものだった。

久保理恵は後部座席を振り返ってみた。すっかり顔馴染みになってしまった二人の男がやはり注意深く理恵たちを監視している。慣れというものは恐ろしいもので、理恵にはほとんどなにも感じなくなっている。二人の男たちも退屈そうだった。太った男が食べ物を口に詰めこんで、もぐもぐさせている。眼鏡をかけたいかつい顔立ちの男は、生あくびをかみ殺しな

がら、新聞に目を通して見る。

ずっしりと、腹にしみわたるような地響きをあげ、機体が地上に舞い降りた。理恵はシート・ベルトをほどき手荷物を頭上のボックスから取り出しながら、もう一度後ろの席を振り返った。今度は眼鏡の男と視線が合い、男はその瞬間、にやりと笑った。それが理恵には意外だった。

サンフランシスコ国際空港は米国西海岸の表玄関にふさわしく、超近代的な大空港だ。

シオリは急ぎ足で歩いている。国内用の到着待合ロビーを振りけると、タクシー・ターミナルがある。待たされることなく、二人はイエローキャブに乗り込んだ。

右手にサンフランシスコ湾をみながらタクシーは高速で走っている。やがて左手の丘陵にジョン・マクアレン公園が視野に入ってきた。とらえどころがないロサンゼルスとは違って、サンフランシスコはまとまりのある街のように思える。なにしろ理恵は、一度サンフランシスコに降りたとはいつても、飛行機を乗り継いでニューヨークにそのまま飛び立ったのだから初めての街だ。サンフランシスコ湾に目を落としながら、理恵はつかのまの旅情を楽しんでいる。

ロサンゼルスで毎朝新聞の支局に連結を入れると、裕美は昨日の午後、サンフランシスコに入っているとの伝言が残されていた。

「今ごろ裕美が首を長くして待っているんじゃないかしら」
シオリがそういった。

裕美はノブ・ヒルの高台に聳えるフェアモントに部屋をとってあるらしい。サンフランシスコでは高級のホテルである。

「私たちもここにしようか？」
「料金は高いよ」

二人は冗談をかわしながら、サンフランシスコでの宿泊先をフェアモントに決めた。理恵がロサンゼルスから東京に入れた電話では、佐瀬卓也も弾んだ声で三日後の週末にサンフランシスコに入るといつていた。

港と船、チャイナクウン、市内を走るケーブルカー、そしてサンフランシスコ名物のゴールデンゲート・ブリッジ、自然環境も素晴らしい街だ。

サンフランシスコは洗練された渋い雰囲気を持ち、旅情を誘うに十分な舞台効果を持っている。佐瀬との初めての外国での旅に理恵は次第に心が弾んでくる。

サンフランシスコは本当に坂の多い街である。そのたびに街の風景が変わるのが、面白い。いくたびか丘を越え、黄色のキャブはようやくシティの中心街に入ろうとしているところだった。空港から三十分ほどの距離だろうか。目の前にフェアモント・ホテルのタワーが見えてきた。

フェアモント・ホテルは大理石をふんだんに使用した本館と二十四階建ての高層タワーからなり、そのはす向いには、一九二六年建築という由緒あるマーク・ホプキンス・ホテルが静かなたたずまいを見せている。

イエローキャブは滑るようにフェアモント・ホテルの車寄せに入っていた。シオリは後をつけてきた車がないか、注意深く振り返った。二人の男たちの姿は見えなかった。それにしてもしつこく食い下がってくる男たちだ。

ホテルのレセプションに、裕美からのメッセージが残されていた。

「なんだって……」

理恵がのぞきこむようにして聞いた。

「夕方の六時、このバーで待っていると書いてあるわ。彼女、どこかに出かけているみたいね」

それから一時間後の午後六時少し前に、二人は連れだって、タワー最上階のバーに入った。展望のよいバーである。サンフランシスコ湾が一望のもとに開けていた。まだ、時間が早いせいか、閑散としている。奥まった窓際の席に裕美の姿があった。裕美が立ち上がり、大きく手を振っている。

「しばらく……でした」

三人はバーボンの水割りを満たしたグラスをあげた。

裕美はジーンズのスラックスに緑色のセーターが良く似合っている。対照的な格好をしているのがシオリで、いかにもキャリアという服装をしていた。理恵は薄いピンク色をしたニットのスーツを着こなしている。昔からニットが好みだった。

服装のことも気にすることなく、気楽な格好でバーに入れるのも、サン

フランシスコならではのことのようだ。三人の女たちはたわいない世間話によく笑った。こういう場面での主役はいつものことだが、理恵である。

男前のバーテンの品定めが一段落したところで、改まった口調で切り出しだのは裕美である。

「シオリ、あなたはロバーツ・ハドソンという男のことを知らないかしら。コロンビア大学の教授を務めているとかいわれている人なんだけれども…」

理恵とシオリは思わず顔を見合わせた。裕美もあの論文のことを知っていたのか。そうすると、裕美はロバーツ教授を追って、アメリカにやってきたということになる。

さすがに経験を積んだ新聞記者である。裕美は二人の表情の微かな変化を見逃さなかった。

「あなたたちも知っているのね」

裕美はすかさずいった。そして、通産省の田所官房長から紹介を受けた男にロバーツ教授の論文のことを教えてもらったこと、社に帰って米国議会図書館のデータ・ベースを呼び出してみたが、ロバーツ教授の論文が全文削除されていたことなどを、裕美は二人に手短かに話して聞かせた。

理恵の顔が青ざめている。なぜ、議会図書館のデータ・ベースからロバーツ教授の論文が削除されたのか。

「ロバーツ教授の論文だったら私も読んだことがある。日米関係に起こっている現在の事態というのかしら、現在の状況をかなりの確に言い当てている論文だと思うわ。でも裕美のいうように、それをデータ・ベースから削除しなければならぬような性格の論文であったとは思われない…」

理恵はさりげなさを装いながら、『米国市場の防衛』と題するロバーツ教授の論文の中身をかいつまんで話した。間違いなく同じ内容である。裕美はいつになく興奮している。

「コピー持っていない？」

「メモならあるわ」

「是非とも読んでみたいわ。その論文はどうして失くなったのかな」

理恵と裕美の間で、そんなやりとりがかわされているとき、シオリが横

あいから口を挟んだ。そして、産業調査員室の顧問弁護士の紹介で、一度だけロバーツ教授に会ったことがある、とシオリはつけ加えた。

疑惑の人物が、シオリの身近にいたとは、これも理恵には驚きだった。「きのう理恵からその話を聞いたときにはすぐには思い出せなかったけど、その人は私の知ってる人と同一人物のような気がするわ。でも、そんなことってあるのかしら……」仮に今度の事件のシナリオを描いた人物がいたとしても、つまり作戦計画を人目に触れやすい論文の形をとって発表するとは、考えられないし……」

そうシオリがいった。

ロバーツ教授の論文がデータ・ベースから削除されたのは、意図的だったのか、それとも偶然だったのか。事件の鍵を握っている人物はロバーツ教授ではないのか。さらに今度の事件のシナリオは、教授が書いたその論文ではなかったのか。裕美はそうした意味のことを盛んに述べた。玄人筋にはうけそうな話ではある。だが、それにしてはできすぎた話のようにも思える。そんなふうに、シオリは否定的ないい方をした。

「でも、商務省がスポンサーになっているのよ。そういう背景があるとすれば、なおさら疑ってみたくもなる」

理恵が裕美に助け船を出した。シオリは暫く考えこんでいた。もし裕美がいうように、影に仕掛人が存在するとすれば、ことさら秘匿を要するのが、その種の情報だ。それを公開のデータ・ベースに載せていた。論文を事件のシナリオというには、そこが矛盾するところだ。

影の仕掛人がロバーツ教授自身なのか、それとも別な人間であるのか。状況を見る限りでは、裕美がいうようにロバーツ教授の疑惑は濃厚である。「だったら、紹介してよ。ロバーツ教授に会ってみれば、わかることだから……」

ここらあたりの切り替えは、昔の裕美のままである。ロバーツ教授に会ってみればわかる話だ、というのは裕美のいうとおりだ。シオリが軽くうなずいた。

いずれにしても、裕美はワシントンやニューヨークでの取材を予定している。話は簡単にまとまった。三人とも一度はニューヨークに戻ることに

なる。そのときにロバーツ教授に面会を申し入れてみることを、シオリは約束した。

タワーの窓の下に美しいサンフランシスコの夜景が広がっている。湾を挟んだ対岸がオークランドである。ベイ・エリアに沿ってきらきらと、明りがついている。水割りのバーボンは心地よく喉元を過ぎていく。湾上に光の帯が走っているのが、シティとオークランドを結ぶベイ・ブリッジのようだ。

理恵はサンフランシスコの夜景にみとれながら、ぼんやり佐瀬のことを考えていた。このごろの佐瀬を見ると、なにか憑かれたように必死で仕事をしている。今度も佐瀬は何かを企画しているらしい。無理をしなれば……理恵は少し感傷的な気分になってサンフランシスコの夜景に見とれていた。

「で、これからの予定は？」

シオリが裕美に聞いた。

裕美は日本の半導体メーカーの投資が集中しているサンフランシスコ周辺の現地工場を取材してみたいといった。西海岸には日浦や東洋電気など、日本の半導体メーカーが工場を建設して、半導体の半製品を持ち込み、RAMやらマイクロプロセッサなどを生産していた。投資が集中しているだけに、問題の多い地域でもある。現地工場の実態を探ることから、今度の事件の真相に迫りたいというのが石井裕美の取材の目的のようだ。

「私たちもそうなの。どうせだから一緒に回ってみることにしない？」

シオリは、そういった。

2

三人は翌日の朔、レンタカーを借りるとまずシリコン・バレーに向かった。運転をしているのはシオリだった。助手席に裕美が座っている。

よく晴れていた。日が高くなるにつれて、気温も上がってくる。真冬とは思えないような過ごしやすい気候である。サンフランシスコからシリコン・バレーまでは六十四キロの距離。サンフランシスコ湾の南東に広がる

平坦な地域である。街は湾岸に諧って帯状に広がり、この地域にはコンピュータや超LSIなどに関連した企業が集まり、世界有数のハイテク産業の街である。

かつてはサンタクララと呼ばれたシリコン・バレーは、第二次世界大戦の直後までは果物などを細々と生産する寒村に過ぎなかった。だから街の歴史は浅い。シリコン・バレーがハイテク都市として世界的に注目されるようになったきっかけは、トランジスターを発明したウイリアム・シヨクレーが一九五五年に『シヨクレー半導体研究所』を作ったのが始まりとされている。街に隣接して工科系のスタンフォード大学があり、シリコン・バレーはスタンフォード大学が送り出す優秀な頭脳を吸収しながら、ICや超LSI、マイクロプロセッサなど、電子工業の革新的なハイテク製品を次々に生み出し、今日のコンピュータ社会の基礎を築き上げた。

現在でもなお、世界のエレクトロニクス産業をリードしているのがこのシリコン・バレーである。街の人口は百三十万人、サンフランシスコを遥かに凌駕するまでに成長した。国道八二号線、地元の人々にとっては、エルカミノリアル通りといった方がわかりが早い、その道筋に沿ってシリコン・バレーは発展を続けてきた。



シオリは幾度かシリコン・バレーを訪れたことがある。ハンドルを握りながらシリコン・バレーがハイテク都市として成長してきた歴史を話してきた。左手にはサンフランシスコ湾が広がり、右手にはサンタタルーズ山脈の無骨な山並み見える。

車はサンフランシスコ湾に沿って、南下していく。やがてパロアルトの街が見えてきた。そこがシリコン・バレーの西の玄関にあたる。パロアルトはスタンフォード大学の所在地でもある。この大学は西部開拓時代に鉄道事業で

巨富を築き上げたりランド・スタンフォードが基金を寄付して、創立された。全米各地から優秀な学生が集まる名門総合大学である。シリコン・バレーは、このスタンフォード大学を中核として発展を続けてきた。

ヒューレット・パッカー社の本社もこのパロアルトにおかれている。街の中央部から少し離れた場所にそびえる同社の高層ビルは、この街に夢と冒険心を抱いてやってくるベンチャー企業家たちの資金調達を手助けする、ベンチャー・キャピクリストたちの居城である。

パロアルトを過ぎると、次はマウンテンビューの街が見えてくる。とはいっても、バレーには工場や研究所が軒を並べているので、余所者から見れば、果してどこが街の区切りになっているのかは、判然としない。ここにはフェアチャイルド・セミコンダクタの本社がおかれている。フェアチャイルドの買収問題で、日米がぎくしゃくしたのは三年ほど前のことになる。

「バレーの端までいってみよう」

シオリはいった。

マウンテンビューをさらに南下すると、サユーベル、クパティノーさらにバレー最南端のサンタクララの街に出る。半導体の主要企業のほとんどはここに本拠を構えている。文字通りここがバレーの中心地である。サンタクララはエレクトロニクス産業の技術革新で、常に先陣グループを走り続けるインテル社が居城を構える。このあたりからロスアルトス・ヒルズが西方の低い山並のなかに見える。シリコン・バレーの成功者たちの高級住宅街だ。

少し戻ると、国道二八〇号線のすぐかたわらには、シリコン・バレーで最も典型的な成功をおさめた企業として知られるアップル・コンピュータがある。アップル・コンピュータはアター社を辞めたスティーブソン・ジョブスがロスアルトにある自宅のガレージを工場に改造して、そこからパーソナル・コンピュータを初めて世に送り出した会社だ。いまもお夢と希望を膨らませてシリコン・バレーにやってくる若いベンチャー企業家たちの憧れがアップル・コンピュータだ。

いまもお、シリコン・バレーでは細胞分裂をくりかえしながら、新し

いベンチャー企業が生れている。しかし、どこか黄昏^{たそがれ}に見えるのは、たんに気のせいだけではなさそうだ。ハイテク産業を襲った不況の波が、このシリコン・バレーにも押し寄せてきているように思える。

さらに車を走らせると、そこがサンノゼだった。パロアルトやサニーヒルなどが、シリコン・バレーの光あたる表の部分だとすれば、サンノゼはシリコン・バレーの陰の部分である。サンノゼに車を乗り入れてみて、三人はハイテク産業を襲った不況がいかに深刻なものであるかを知った。

ハイテクだ、エレクトロニクス産業だ、とはいっても、意外にも労働集約的で単純な手作業を要求されるのだ。その単純な手作業労働を支えているのが、ここに住む人々である。サンノゼにはメキシカン、フィリピン、ベトナム、最近では中国大陸からの移民も増えている。彼らはこの街にスラムを形成して住み着いている。数年前までは、この街へくれば仕事にあぶれるようなことはない、その保証は十分にあつた。

不況の深刻さを本当に気付かされたのはこの街に入ってからだ。

仕事にあぶれた彼らは、あてもなく街のなかをさまよっていた。退廃的な気分が街を支配している。いかにもジャーナリストらしく、裕美は目ざとくそのことを指摘した。不況の嵐はまず、社会の底辺に生きる人々を先に襲うことになるのか、裕美はそんな意味のことをいった。交通問題や環境汚染、麻薬や売春といった犯罪の増加など、シリコン・バレーも都市に固有な社会問題を抱えているようだ。失業の増大がそうした社会問題にさらに拍車をかけ、深刻化しているようにみえた。

「そうかも知れないね」

理恵がうなずいた。

サンノゼのダウンタウンに車が入ると、そこがシリコン・バレーの終着駅である。街全体がなにかせかされたように騒然としている。ハンバーガーの店にも失業者が溢れていた。三人を見る目が、どこかとげとげしく険悪だった。昼前だというのに、酒の匂いが立ちこめている。三人は早々に引き揚げることにした。シオリが運転する車は国道一〇一号線を引き返している。

「日浦に連結を入れてあるので、あそこの工場を見せてもらうことにし

ない？ たしかあそこはサンタクララにあったと思ったけど」

国道の左手に『日浦セミコンダクタ・アメリカ社』という看板が見えた。サンタクララの中央を十文字に横断する道路を左の方に約一キロほど入ったところに、それらしき工場の全景が見えてきた。

そのときだった。異様な光景が目に入ってきた。

ゲートの前で数百人に及ぶ男たちが、氣勢をあげている。どうしたというのか。シオリは車のスピードをゆるめて、注意深く騒ぎのようすを見ている。労働者のデモなのか。プラカードを振り上げ、氣勢を上げているところからみると、間違いなさそうだ。日浦の米国工場で、労働争議が起きているとは、聞いていない話だった。

三人は顔を見合わせた。車は正面ゲートに近付いている。三人の乗る車にデモ隊が気付いたようで、黒人の若い男が真っ白な歯を見せながら拳を突き上げる格好をしている。理恵はすっかりすくんでしまった。裕美はバッグからカメラを取り出し、盛んにシャッターをおしている。

デモ限の何人かが三人の車の方に近付いてくる。なにかを叫んでいるようだ、言葉がわからぬ。

らない。工場正門の道路いっばいにデモ隊が広がり、ゲートを封鎖する形をとっている。

「どうしよう？」

理恵が震え声で叫んだ。そのとき、ゲートが開き、制服をきた数人のガードマンがショットガンを構えながら飛び出してきた。デモ隊がすうっと、道を開いた。ガードマンの一人が車のガラス窓をたたき、声を荒げて何事かを聞いている。よく聞き取れない。シオリがガラス窓を開けた。身分証明書の提示を求められた。

ガードマンに囲まれるようにして、ゆっくりとスピードを落しながら三人を乗せた車は工場のなかに入っていた。後ろの方からデモ除の歓声が聞こえてくる。

「とんだところをお見せしてしまって」

オフィスの玄関まで出迎えて出ていた中年の男が、恐縮そうな顔をした。男は日浦アメリカ社の副社長の服部康夫と名乗った。

オフィスビルに入ってしまうと、外の騒ぎは嘘のように聞こえてこない。三人は二階の来客用の応接間に通された。応接間の左奥に工場の全景を示すプラモデルが置いてあった。この工場がいかに優秀な事業成績を収めたか、本社社長が贈った感状が大仰な盾と一緒に飾ってあった。服部副社長は、三人が差し出した名刺を眺めながらうなずいている。

小太りで、背が低く、その上に頭は禿げている。服部は度のきつい眼鏡をかけた典型的な日本の男子という風貌である。デモ騒ぎですっかりまいつているのか、ひどく疲れた顔をしている。

「木原さんとは、ニューヨークで一度お目にかかったことがございますね」「ええ、たしかにどこかで」

シオリが曖昧に答えた。工場見学は秘書を通じて申し入れたので、服部と話すのは今日が初めてのはずである。シオリには確かな記憶はないが、服部の方には明確な記憶が残っているようだ。たぶん、電子業界団体の会合かなにかで、名刺を交換しているのかも知れない。なにしろシオリは大勢の業界関係者と会っている。親しくしている人は別にして、いちいち覚えておくには、あまりにも多くの人に会っている。服部もそのうちの一人であるのかも知れないとシオリは思った。

服部は三人の名刺を見比べながら首をひねった。三人がどういう関係にあるのか、どうもわからないという顔をして、服部は名刺を熱心にのぞきこみ、一人で何度もうなずいている。三人の女性が連れだって、現地企業の状態がどうなっているか、それを見せてもらいたいというのが申し入れた。しかし、それぞれ職場も職業もばらばらである。服部はそのことを訝っているようだ。

「新聞記者とシンクタンクの研究員。なるほど……工場はご覧いただいたような状態にあります、どうも困っているのです」

「なんですか、この騒ぎは？」

無遠慮に聞いたのは石井裕美だった。服部は本当に困ったという顔をしながら、どう答えるべきか、迷っているようだ。

「実をいうと、よくわからないのです。うちの社員も動員されているようですから、労働組合の争議のようではあるのですが、それにしても要求がは

つきりしていないのです」

はつきりしない答えである。他人事ひとことのようにも聞こえるいい方だ。要求も明確にしないで、いきなり争議行為に入るなどということはありませんか、確かにおかしな話だ。服部が困惑しているのもうなずける。

日浦がシリコン・バレーに拠点を築いたのは今から十年ほど前のことになる。最初は半導体関係の技術情報の収集と研究開発のためのセンターとして設立された現地法人だったが、九五年に初めて256キロビットRAMを生産したのを皮切りに、現地生産工場としての役割を持つようになった。折から半導体貿易摩擦が深刻化していたこともあって輸出を現地生産に切り替え、現地工場での生産を拡大していった。

服部が副社長としてシリコン・バレーに赴任したのは、ちょうどその時期である。その後拡張を重ね、昨年秋には待望の1メガビットRAMを量産ラインに乗せ、現在、月産五万個の半導体を生産している。売上也順調に伸びており、経営状態も決して悪くはない。テキサス第二工場が動き出せば、米国むけの半導体の七十パーセントは現地で生産されることになっているらしい。服部の話では、労使関係も安定しており、生産管理や品質管理運動など、いわゆる日本的経営についても、従業員たちは理解をもって協力してくれているようだ。この十年間、労使関係で一度も問題を起こしたことはない、と服部は断言した。

「労務管理には正直いって、そりゃあ気を使いましたよ。労使関係もうまくいっていたらと思っていたんです」

服部は外国で労使関係をうまくやっていくことがいかに難しいことであるかを話した。

従業員総数一千五百人、シリコン・バレーでは中堅の半導体工場である。現在、この工場では、1メガビットRAMの他にも、マイクロプロセッサや、ユーザの求めに応じてカスタムLSIなども手掛けている。論理素子の生産にも力を入れている。少し問題があるとすれば、西海岸一帯は最近の労賃値上がりで採算が厳しくなっているため、第二工場として建設中のテキサス工場に量産品の一部を移転することを計画していることだ。もしかして、そのことが彼らを刺激したのかも知れない、と服部はいった。

だからといって、首切りやレイオフを考えているわけではないのだから、彼らにとつては雇用不安はないはずだ。そのことは従業員にもよく説明をしている、と服部は続けた。要するに米国日浦の幹部たちは、今度の争議行為がなにが原因で起こったのか、事態の把握がまったくできていないのだ。

「だから不思議なんです。それに東洋電気や東京通信機の工場に対しても、同様な争議行為が同時に発生している。考え過ぎかも知れませんが、今度の反トラスト法違反事件と関係があるのではないか……どうみても、日本企業が担い討ちにされているような気がしてならないのです」

「日系企業の工場で、争議行為が同時多発しているんですって？」
裕美が聞き返した。

「そうなんです。東洋電気にデモ隊が押し寄せたのは、昨日の朝からですが、続いて今日の早朝から、今度は東京通信機の工場にデモ隊が押し寄せてきている。まあ、光栄なことにわが社は最初にデモ攻勢の洗礼を受けることになったのですね」

服部が自嘲的にいった。

デモ攻勢は日本企業の工場に対して、組織的、計画的に仕掛けられている可能性が大きい。なにしろこの街では三十パーセントほどの操業短縮が行われ、また、小規模なベンチャー企業の一部は、この不況のあおりで倒産に追いこまれているらしい。シリコン・バレーは確かに失業者の群れが街に溢れていた。欲求不満がつのり爆発しそうな雰囲気である。攻撃目標さえはつきりさせれば、火に油を注ぐようなもので、いつ暴動が起こっても少しも不思議ではない危険な情勢にあるのだと、服部はいった。その格好の攻撃目標として日本企業が選ばれたのだろうか。

「ストに参加している従業員は、どのくらいの人数なのでしょう。生産に影響がどの程度ですか？」

シオリが質問をくりかえしている。かたわらで裕美と理恵が熱心にメモをとっている。想像以上に、米国現地の状態が険悪となっていることに、理恵は驚いた。

「ゲートに姿をみせているデモ隊のなかには、ごく少数しかうちの社員は

いないようですし、休暇をとっている社員は三十パーセントほどでしょうか。その意味では基本的には問題はない……それに最近、注文が減つていきますので、フル操業をやらなければならないという状態でもないですしね」

日系企業を狙い打ちにする目的はどこにあるのか？ 考えられることのひとつは、今度の反トラスト法違反事件との関連である。いやがらせなのか。それはありうることだ。そういえば、デモ隊が掲げるプラカードに「ゴ―ホーム・ジャップ」といった、日本人にとっては、まことに刺激的なスローガンがあつたのをシオリは思い出した。労働争議のスローガンにしてはいかにも扇動的に過ぎる。

米国の労働法ではストライキおよびピケッティングなどの争議行為については、第七条で成文法上の根拠が与えられている。つまり労働者は一定の条件を満たす範囲において、ストライキの権利とピケッティングの権利を認められている。しかし、ストライキが発生するまでに労使関係が悪化するケースとして考えられるのは、たいていは経済的要求か、さもなければ、使用者が不当労働行為を行ったなど、明確な理由かある場合に限られる。米国の労働組合が強いからといってめつたやたらにストライキをやるわけではないのだ。

シリコン・バレーでも日系企業の賃金はまずまずの水準にある。だから経済的理出でストライキが起こるとは考えられない。そうだとすれば、やはり使用者側に不当労働行為があつたということなのか。とくに微妙なのは黒人とかメキシカンなどこの国のマイノリティ対策である。対策を間違つと、えらい騒ぎになってしまうのだ、と服部はいった。どう考えても、そんなことで彼らと摩擦を引き起こすような問題はないはずだと、これも服部は断定的な口調でいった。いずれにしても問題を解決するには彼らと話合う以外ない。肝要なことは話合いの場を設けることだ。

「話合いの場を持っていないのですか」

今度は理恵が聞いた。誰でも考え付くことだが、こういう場合の問題解決は、当事者間で話し合うことである。労働法でわざわざ団体交渉の権利を労働組合に認めているのもそのためである。

労働組合が話合いに応ずることを拒否してストライキを続けている場合、

使用者は逆手をとってロックアウトという強硬手段に訴えることも、労働法では同時に認めている。だから話し合いを拒否することは労働組合にとつても、得策ではない。要求を出して、それが受け入れられない場合にはストを打つ。ようすをみながら、団体交渉を要求するーそれが労働組合がとる常識的な戦術というものだ。要求も出さずにいきなりストライキを打つとは、これはいかにも乱暴な話である。

「話し合いを持つにも、交渉の主体がはっきりしないのですよ。工場の労働者は全米電子工業労働組合連合会に組織されているのですが、その支部の幹部ですら交渉権を与えられていないようですね。それにゲート前の連中はただ騒いでいるだけだし……まともに話ができる連中ではありません」

「交渉の主体がはっきりしない？」

「そうなんです」

ますます不可解な話である。要求も明示せずにピケッティングを張り、交渉の主体もはっきりさせずに、争議行為に入っているというのだ。常識的には考えられないことだ。

争議行為に名をかりた日系企業に対するいやがらせなのか。そうだとすれば、陰に扇動者がいることになる。その扇動者の狙いは、どこにあるのか。疑問は膨れあがるばかりだ。シオリはしきりになにかを考えているようだ。

服部は忙しそうだった。ひっきりなしに電話が入ってくる。また、ゲートに車が入ることで騒ぎが起こっているらしかった。そのたびにいちいちガードマンが連結してくるのだろう。また、応接間の電話が鳴り出した。服部は西部訛の英語を使いながら細かい指示を与えている。渉外担当副社長ということであってみれば、これもしかたないことなのかも知れない。嫌な顔もせずに、服部は丁寧に受け答えをしている。

「争議行為に対しては、使用者側にも対抗する権利と救済措置が、法律によって認められているはずですが……とくに今度のような場合ですと、組合側の争議行為の根拠がはっきりしていないわけですから、裁判所も争議行為の差し止めを認めてくれるんじゃないでしょうか」

理恵がいった。

「ええ、そのことも顧問弁護士と協議してみたのですが、なにしろ裁判は費用と時間がかかりますからね。それよりは……」

「それよりは？」

再び理恵が聞いた。

「米国に工場をおいておくことの意味と申しましょうか……。反トラスト法違反事件に続く今度の労働騒動でしょう。本社の方でも米国工場の位置づけを抜本的に考えているようでした、この先どうなるか……」

「といますと……？」

服部は悲観的だった。現在の状況からいって考えられることのひとつは、シリコン・バレーの工場には研究機能と情報収集の組織だけを残して、生産部門は全面的に撤退することだ。それは充分考えられることだと、服部は寂しそうにいった。

反トラスト法違反事件で日本企業は逮捕者までも出し、その上に理由のはつきりしない労働攻勢に晒されている。さらにいえば、今度の事件の影響なのかも知れないが、どんどんユーザーが離れていく現象が起こっているという。世間の風当りも強まっている。事態は確かに深刻である。撤退を本気になって、考えたとしてもおかしくはない情勢である。バレーに進出している邦人企業各社は疑心暗鬼になっている上だった。

「今度の事件を裁判で争うにしても、これは長期化することを覚悟しなければなりません。挙句の果てに黒判決でも出たひには目もあてられないじゃないですか。そんなことで争うより、とりあえず、我々が米国市場から撤退することで、米当局に対して恭順の姿勢を示し、司法省と司法取引の可能性を探ったほうが得策ではないか、と私は思うのですが、産業調査員のお立場の木原さんの御意見はいかがなものですか？」

微妙な質問である。反トラスト法違反で摘発された現地法人の責任者たちは、その衝撃の大きさのためか、ずいぶんと弱気になっているようだ。服部がいうように、この種の裁判は、結論が出るまでに最低でも十年はかかる。まともに弁護士費用を払うとすれば、一時間あたり三百ドルと考え

ても、数百億円の費用となる。しかも、状況を冷静にみれば決して日本の企業にとって有利な判決が出る期待はもてそうにない。そこらあたりのことを計算すると、服部のいうこともうなずけなくはない。

「でも、やはり主張すべきは、この際ですから主張しておくべきだと思います。全面的に相手のいい分を認めてしまったのでは、今後の日米関係を考えましても、将来に禍根を残すのではないか、そのように思います」

「あなたのいわれることは、たしかに正論だと思います。でも、ご覧になったでしょう、表での騒ぎを……あれじゃとても持ちこたえられそうにありませんね。騒ぎが起こってまだ三日目だというのにこの状態ですからね。それに今後なにが起こるか、まだまだ予断はできないのです」

服部は不安げだった。

「お話をうかがった限りでいいますと、あれは正当な争議行為とはいいい難い。それならば、威力業務妨害で彼らを訴えることもできるのではないかと、思いますか……」

裕美がいった。

「それができないのですよ。ご覧いただくように、ピケッティングを張っているとはいっても、工場のなかに入ろうとする人を実力で阻止しているわけではない、暴力を振るっているわけでもないのです。工場の前で騒いだからといって、法律的には取り締まりようがないということのようです。実に巧妙なやり口なのです。たぶん彼らの背後には法律の専門家がっているのでしょうかね」

服部はすっかり参っているようだ。やはり最も気にかかることは、世論の動向である。服部に限った



ことではなく、日系企業の経営者たちは、日増しに悪化している対日世論にひどくおびえているようだ。ことをこれ以上荒立てたくない、というのが本音なのだろう。だから積極的にピケッティングを排除できないでいる。デモ隊はその弱みについてきているようにも思える。

また、応接室の電話が鳴った。今度は材料の搬入のことで、ガードマンとデモ隊との間で、トラブルが起こっているようだ。どうもデモ隊のいやがらせ戦術は次第にエスカレートしているようだ。ちょっと失礼します、というと服部は応接室を出ていった。

三人は早々に引きあげることにした。

ゲート前で、服部がデモ隊の指縁者とおぼしき男と何事かを大声でかけあっている姿がみえた。ゲート正面には大型トレーラが立ち往生している。それをデモ隊が取り囲んでいる。失業者の群れが面白半分デモ隊に加わったのか、デモ隊の人数はさらに膨れ上がっていた。正面ゲートは騒然となっている。トレーラがUターンをし始めている。デモ隊から歓声が起こった。服部が肩から力を抜くようにして、ゲートの方から戻ってくる。服部の背後からデモ隊が罵声を浴びせている。指揮者とおぼしき男が長髪を振り乱しながら拳を振り挙げている。

「ご覧の通りですよ」

服部が力なくいった。

三人は挨拶もそこそこにして、日浦工場を出た。デモ隊は車の前に立ちはだかり、なかにいる三人に罵声を浴びせかけてきた。ガードマンもなすべもなく立ち尽くしている。日浦に出入りする人間はすべて敵だとも思っているのか、デモ隊の一部が車を取り囲んでボディを勢いよく揺すり始めた。シオリはアクセルを思いっきり踏みこみ、ロウギヤに手をかけた。一人の男が何事かを叫びながら、ボディを揺るのを制止している。

そのとき前方の人垣が崩れ、わずかに隙間が生じた。その隙間を突き、シオリはエンジンを全開させて、あっというまに人垣を突っ切った。デモ隊は拍子抜けしたように呆然と三人が乗った車を見送っている。

シオリは正面をまっすぐに見ながら、スピードを加速させた。極度に緊張したためか、額に薄っすらと汗が滲み出ている。裕美は後部座席から懸

命にシャッターを押し続けている。緊張をとかれた理恵は肩で息をつくようにして、大きく深呼吸をした。

「よその工場も同じ状態かしら？」

裕美が聞いた。

「確かめてみる価値はありそうね」

シオリが答えた。シオリの表情にゆとりの笑みが戻っていた。

東京通信機のシリコン・バレー工場には理恵が東京で調査面談の申し入れを済ませている。今朝ホテルを出る前にもう一度確認の電話を入れておいた。地図で確かめると、日浦の工場から車で十分たらずの距離に東京通信機の工場がある。車はもと来た道に戻り、国道一〇一号线に入るとサニールベルの方向に向かった。

やはり、東京通信機の工場もデモ隊に襲われていた。日浦工場に比べれば、それはどの人数ではなさそうだ。甲高い歓声が聞こえてくる。車は割合スムーズに工場のなかに入れた。

応接室で三人に対応してくれたのは、アメリカ東京通信機の栗本社長だった。挨拶もそこそこにシオリがいきなり本題に入った。

「日浦工場もそうでしたか。我々の方には昨日からですが、今日から臨時休業にはいることにしているのです」

「臨時休業……？」

裕美が聞いた。

「そうです。反トラスト法の摘発を受けてから、キャンセルが相次いでいる上に、この始末でしょう。たった今、本社に連結をして、決めたところですよ」

栗本の表情が歪んでいる。栗本は昨日から起こっている騒動ですっかり気が動転し、質問の意味もよく聞き取れないようである。続けて理恵が聞いた。

「長期化しそうですか」

「まだ、なんとも申せません」

シリコン・バレーの日系企業の経営者たちは、昨夜も会合を開き対策を協議した。だが、これといった知恵も出なかったようで、参加者の誰れも

が悲觀的になっていった。できるだけ正面からの衝突を避け、ことを荒立てないようにして問題を解決すること、話合いの機会を見つけることに全力をあげること、などが改めて確認されたに過ぎない。それに外出などを自粛することなどの申し合わせが行われた。

シリコン・バレーに進出している日本の関係金茶は半導体メーカーだけで九社、シンククンクヤソフトハウス二十三社、通信機メーカー二社、関連商社十八社、家族を含めると約二千八百人の日本人がこのシリコン・バレーで生活している。同じ日系企業とはいえってもそれぞれ立場によって利害関係も異なる。今度の問題にどう対応するか、日系企業の足並みも乱れがちのようだった。ただ、いえることは、誰もが確実な見通しを持っていないことだ。

東京通信機の本社の方でも無理をするなどという、指示を出しているらしい。しかし、肝心なこと、つまり、なぜ彼らが工場に押し掛け、騒動を起こしているのか、栗本もその理由が掴めないでいた。もうひとつ厄介な問題は東京通信機の場合も反トラスト法違反事件が発覚してから注文はがた減りになっていることだ。米国の日系半導体メーカーは追い詰められていた。瘦せぎすで、いかにも神経質そうな栗本社長の顔は苦渋で歪んでいる。米国で半導体生産を続けることに不安を抱いているようで、米国から撤退の方向に気持ちが動いているかにみえた。栗本の話だと、東洋電気の場合も同様なことが起こっているらしかった。

栗本社長からは日浦の服部副社長に聞いた以上の話は聞けなかった。工場の前は静けさを取り戻していた。昼過ぎになって、表の騒ぎは一段落したようだ。工場の前には潮が引いたように人影は少なくなっている。

裕美は車のなかでメモ帳にボールペンを熱心に走らせている。本社に送稿する原稿の下書きだ。電話回線を使って東京に送稿すれば、明日の朝刊にはシリコン・バレーで起こった騒動がにぎにぎしく、紙面を飾るはずだ。シオリは押し黙ったままで、ハンドルを握っている。

理恵は考えていた。モトラム社の倒産、モトラム社が日本企業に独禁法違反ありとして三倍額賠償請求を提訴、続いて司法省が日本企業を反トラスト法違反で摘発、同時に関係者の逮捕に踏み切った。外交ルートでなん

とか打開の道はないかと、日本政府は交渉を申し入れたが、拒絶された。交渉は中断したままの形になっている。

米国の対日世論の悪化、それに今度のストライキ騒ぎ。ロバーツ教授と、彼が書いたという論文のことが思い出された。その論文は議会図書館のデーク・ベースから削除されていた。今度の一連の事件との関係はあるのか。対日攻勢が強まるなかで、日本企業は米国から撤収することを真剣に考え始めている。日本企業は次第に追い詰められている。日本企業の米国からの撤退はシリコン・バレーの雰囲気からすると、時間の問題のように思えた。

事態は急激な展開をみせている。どうも誰かが作ったストーリーに乗せられ、ことが運ばれているのではないか、そんな疑問が沸き上がってくる。理恵は車に揺られながらそのことを考え続けていた。

サンフランシスコ湾は、夕日に染め上げられて、感動的な風景を作り出していた。遠くの方にペイ・ブリッジが見える。自然のなかに人工的な建造物が違和感なく溶け合っている。理恵はサンフランシスコの風景がすっかり気に入った。理恵は考えることを止めた。ぼんやりと、車窓に走る湾岸の風景に見とれている。

「日本なんて脆いものね」

裕美はバックにメモ帳をしまいながらいった。ハンドルを握るシオリがうなずいた。理恵には裕美がなにをいおうとしているのかわかるような気がした。

「せっかくうまくいっていると思っていたアメリカではこの有様でしょう。その上に国内で生産を始めたばかりの4メガビットRAMは、生産を軌道に乗せることができずに不良品を大量に出しているらしいの」

「4メガビットRAMがうまくいっていないんですって？」

助手席に座る裕美を振り返るようにして見ながら、シオリが聞いた。シオリには初めて聞く話である。夕日が眩しかった。

裕美は大きくうなずくと、ゆっくりと答えた。

「そうらしいの」

「いつごろから？」

「そう、去年の末あたりかららしいけど、でも最初は順調だったんだって」
悪いことは重なるものである・昨年末といえば、ちょうど反トラスト法違反事件で日本企業が司法省当局に摘発された時期だ。

半導体各社とも昨年の後半から相次いで4メガビットRAMの生産を始めている。この米国市場での流れも1メガビットRAMに続いて4メガビットが主力商品になるのではないかと期待が膨らんでいた。実際、4メガビットRAMは需要を拡大し、半導体市場は完全に4メガビット時代に移ろうとしていた。進出企業の多くも日本国内での成功に続き、米国市場でも4メガビットRAM生産を計画中だった。

半導体の集積密度を上げること、それをどのようなタイミングで市場に送り出すか、日本メーカー同士の競争は当然として、集積密度を上げるためのメーカー間の競争は日米でも激しく演じられていた。その競争で日本のメーカーがわずかに米国をリードしているというのが、これまでの評価である。4メガビットRAMの生産を始めた各社とも最新鋭設備を投入、少なくとも生産を開始した当初は順調だった。だからこそ反トラスト法違反事件のような問題が日米に起こるのだ、と指摘されているのだ。その期待の4メガビットRAMの生産に問題が起こっているというのである。

「歩留りが極端に悪いらしいの。たとえば三唱電気の場合でいうと、歩留りは五割を切っているらしい……。三唱電気だけでなく各社とも同じ状態にあるらしく、やはり半導体は1メガビットRAMが生産技術としては限界らしいのね」

裕美の話は、シオリには意外だった。

これまでの経験だと、半導体に限らず日本メーカーの生産技術は国際的にも高く評価されている。日本はオリジナリティに欠けるが生産技術にかけては、ずば抜けた技術力を発揮、激しい国際貿易競争を勝ち抜いてきたのだ。

1メガビットでは簡単にクリアした微細技術の壁も4メガビットに入つて、改めて大きな壁に突き当たったということなのか。それにしても4メガビットRAMの生産を開始したメーカーが軒並み生産効率が悪化しているとは……日本の半導体産業は裕美がいうようにその背景となる成立基盤

たるや意外に「脆い」ものなのかも知れない。

右手にサンフランシスコ国際空港が見えてきた。

シオリが運転する車はハイウエーを高速で飛ばしている。大型のセダンは安定感がある。あと三十分もすればシティに入るはずである。

「各社とも極秘で原因調査を続けているらしいのだけれど、どうもはつきりした原因は掴めないでいるらしい」

反トラスト法違反事件を追いかけ始めてから裕美は半導体産業の勉強を必死でしてきたらしく、相当詳しくなっている。これまでの半導体産業はともかく抜群の生産効率を確保することで、米国半導体メーカーとの競争に勝ってきた。たとえば1メガビットRAMではほぼ百パーセントに近い歩留りを確保していたし、4メガビットRAMの場合でも生産をスタートさせた段階では九十五パーセントの歩留りを確保していた。それが五十パーセントを切っているとは裕美がいうようにこれは、確かに異常である。

最近の半導体工場は極限まで自動化が進められており、ほとんど人間が関与する余地がなくなっている。本社の設計部門から送られてくる半導体の設計図は自動的に通信回線を使って工場のコพิวเตอร์に送りこまれ、工場では本社の管理部門が作成した生産計画に基づきこれも本社の大型コンピュータにつながる工場の端末機で、自動的に目的の製品が生産される仕組みになっている。

高集積密度回路の最大の敵は、塵や小さなホコリである。ミクロン単位の塵でも、微細で微妙な超高密度集積回路にとっては致命的な影響が生ずる。だからもし問題があるとすれば、生産過程で発生する微細塵である。しかし、集積密度を高める際に最大の障害になっていた工場のクリーン度の向上も、数年前までは考えられないような数値を確保している。

「その話、本当？」

シオリが聞いた。

「各社ともひた隠しにしているけど、間違いないわ」

裕美が答えた。

半導体を超高密度集積化する上でもうひとつ問題になるのが熱処理である。とくに4メガビット以上の半導体だと単層シリコン基板では高集積化

が実現できないため、たいていの場合は積層タイプ、つまり三次元素子を開発することで4メガビットという超密度集積度を実現した。これが生産工程では問題になる。現在のやり方だと、単層基板を重ね合わせる方式の三次元化を図っているため、ウエハー処理過程でくりかえし何度も高熱で熱処理が行われる。なにしろ処理温度は九百度から千二百度という超高温である。これを連続して熱処理を行うのである。

高温環境に耐えられるかどうか、ここでは素材自体の問題もあるが、それだけでなく、素材が高温で熱処理されるため、基板に埋めこまれてある微細なトランジスタや回路に熱処理の影響が出てくる。半導体の超高密度集積化を実現する上での最大の問題は、超クリーン度をいかに実現するかということとあわせて、基板の熱処理に耐えられるような素材をいかに開発するかにあった。



なければ生産に踏み切るような冒険は起こさない。

半導体の技術進歩は著しい。各メーカーの研究開発のターゲットは、16メガビットRAMから飛んで、次には32メガビットRAMの開発に焦点が移っている。だから4メガビットの生産で、こんな問題が起こるとは考えてもいないことだろう。だが、そこに落とし穴があるらしい。

裕美は車のなかで、そんなことを解説的な口調で話していた。モトムラ社をはじめ米国のメーカーも次々に、4メガビットRAMを市場に送り出すべく開発を進めている。一部のメーカーはこの春からサンプル出荷を始める。とアナウンスしている。このままの状態では確かに日本の半導体メーカーは米国の半導体メーカーに追い抜かれるだけでなく、米国との競争力

は大きく後退してしまう恐れすらある。米国の半導体メーカーに対し優位性を確保しているとはいっても、それはわずかな距離でしかない。

米国市場では日本の半導体メーカーが反トラス法違反で摘発されてから1メガビットRAMの売上は急速に後退している、と東京通信機米国社の栗本社長はいつていた。1メガビットRAMで一時は六十パーセント近くのシェアを握っていた日本企業は次第に後退を重ね、最近の統計では二十パーセント台のシェアを確保するのも難しいのではないかとすらいわれているほどだ。原因のひとつに米国の半導体市場が低迷していることもある。だが、最大の要因は米国の主力ユーザーが今度の事件を契機に日本企業を作る半導体を敬遠し始めたからだ。

モトラム社が中心になって進めた反日キャンペーンは確実な成果を上げていることになる。そして、次の期待製品である4メガビットRAMが生産過程でダメージを受けていることは、まさしく日本の半導体メーカーにとっては死活の問題である。やはり一連の事件が起こった背後には仕掛人が存在するのではないか、裕美はそういう意味のことをいった。米国に、今度の事件を仕掛けた人間なりグループが存在するとすれば、彼らの終極の戦略目標はどこにあるのか。

ロバーツ教授の書いた論文でいえば、外国の脅威的な企業を徹底的に叩き潰す作戦は成功したことになるわけだ。その意味ではあそこに書かれてあったシナリオは完結したことになる。いかにもジャーナリストらしい裕美の分析である。

裕美のいったことに同調するように理恵は大きくうなずいた。シオリはハンドルを握りながら黙って聞いている。裕美の話が一段落したところで理恵がいった。

「そうすると、今後は半導体メーカーも苦しい立場に追い込まれることになるわね。でも、そこまで日本の企業を追い詰めようとするアメリカの狙いはなにかしら？」

「狙い……？」

裕美が一人ごとのようにいった。

「それがわかれば対応策も考えられるのだけどね……まあ、ニューヨーク

ではどうしてもロバーツ教授に会ってみましょうよ。なにかがわかるかも知れない」

シオリが答えた。

車のなかに重い沈黙が流れている。シオリはふっとバックミラーを覗いた。一定の距離をおいて三人が乗る車にぴったりとついてくるセダンがある。例の二人連れの男たちのセダンのようだ。理恵も後続のセダンの存在に気が付いたようだ。裕美が怪訝な顔をして大きく後ろを振り返った。

「何者なの？」

「私たちに興味があるみたいね」

シオリが冗談っぽくいった。ニューヨークから二人を尾けてきた奇妙な男たちのことを裕美に簡単に話しか。

三人を乗せた車はベイシヨア・フリーウエーを通り抜け市街地に入ろうとしている。右手に見覚えのあるジョン・マクアレン公園の丘陵がみえてきた。国道一〇一号線はこのあたりから地元ではジェムス・リック・フリーウエーと呼ばれている。あと十分ほどでフェアモント・ホテルのタワーが見えてくるはずである。

シティの中心街に近づくにしたがって、フリーウエーは車で混雑しはじめた。どうせ行き先はわかっていると思っっているのか、二人連れの男たちのセダンは途中で姿を消していた。

「産業調査員が米国政府の監視のもとに置かれているなんて、驚いたわ…
…まるで敵性国家の人間の扱いね、これは。…どうして対抗措置をとらないの」

日米の緊張関係がこんな形で現れていることに、裕美も驚いているようだ。

「どうせアメリカ政府に隠しだてしなればならないようなことをしているわけではないしね。それにアメリカの女旅ではなにかと危険が付きまとうので、ああいうボディガードみたいな男がいると便利かもしれない…
…」

シオリが笑いながら答えた。実際、彼らは危害を加えようとしているわけでもなさそうだし、こう公然と付きまとわれてみると、もはや一緒に旅

をしているも同じだ。理恵がそんなことをいって笑わせた。

「で、明日からどうするかだ」

裕美が男のような口調でいった。

「かつちりした取材計画を、立てずにきたもんだからね」

裕美がそういうと、シオリはサンフランシスコで少し、現地の事情を調べてみてはどうかと、いった。

結局、三人は行動をとることに決まった。三日後にワシントンに入り、それからニューヨークに戻ることにした。ニューヨークでは是非とも問題の論文をかけたロバーツ教授に会わなければならない。裕美はそのことを幾度も口にした。

シオリは慎重にハンドルを握り、ややスピードを落とし坂道を登っていく。やがてフェアモント・ホテルの正面玄関が見えてきた。車はゆっくりと車寄せに近付いていく。

夕方のロビーは旅行客でごった返している。

レセプションでキイを受け取り、エレベータホールに向かいながら、理恵は口元に微笑を浮かべながらゆっくりと自分の方に歩み寄ってくる一人の男に気付いた。疲れた表情をしている。が、目は異様な光を帯びている。確かに佐瀬だ。

理恵は驚きで声を上げそうになった。開口の午後にはサンフランシスコに入るといつていたはずの佐瀬卓也の姿がロビーにあった。佐瀬卓也がいま、理恵の前に立っていた。

(つづく)